

氏名	稲垣 美侑
ヨミガナ	イナガキ ミユキ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第659号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 所在の輪郭－包まれる風景へ 〈作品〉 青の遊泳 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	O JUN
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	佐藤 道信
（作品第1副査）	女子美術大学	准教授	（芸術学部）	Linda Dennis
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	三井田 盛一郎
（副査）				（）

（論文内容の要旨）

本論文は、「所在の輪郭－包まれる風景へ」と題し、絵画を基軸とする筆者が、人の居る場所としての“家”やその周囲環境をくり返し探る行為によって、個人とその周縁から生起される固有の風景を捉え直し、生きる場所や居どころを考察する創作論である。

薄皮一枚隔てた向こう側はいつも未知数で、知ったふりをしながら実のところよく分かっていないことで溢れている。私たち人間は、言語によって眼前の事象ひとつひとつに呼称、意味や価値を与え、観念を共有することで、初めて漠然と広がる世界を捉えられるようになった。言語を持たない生後まもない赤子は、心身の発達とともに自己の身体と外側を分け隔て、世界を少しずつ固有のものとして認知してゆく。“外”の驚異と出逢いを繰り返しながら、やがて目の前の出来事を当たり前の日常として接するようになる。しかし私は、身近な“外”となった日常への気づきにこそ、打ち返される新たな対象としての“内”、自己とその居どころを再確認する重要な契機があるのではないかと考える。個人の所在を捉え直す行為が、同時に他者や外界との関係性を再考させる。日々揺動する世界において、はたしてどこからどこまでが内側で、どこからどこまでが外側といえるのだろうか。今一度、眼前の風景に触れ、確かめることからはじめてみる。

本論文の構成は、3章から成る。

第1章「所在の輪郭－人の居る場所」では、第1節「人の居る場所」で、私たち人間と場所との身体的・心理的な結びつきを考察し、本論文のテーマ“所在”と“輪郭”の意味する範囲を定める。第2節「家－広がりゆく地点」では、人間が生きていく上で欠くことのできない“家”という存在について考察する。ここでは“家”を、私たちの身体を包みこむ“始まりの場所”として捉え、家の性質や役割、住居の発展と展開に触れながら、住まいが個人に与える影響と相互作用性について述べる。また住まいと居住する身体の関係性から生まれる「家」という存在と、そこから生起された自作品について解説する。人々が帰りたいと希求する“家”とは、どのような姿をしているのだろうか。室内と室外の視点から“家”にまつわる記憶とその輪郭を探る。第3節「変容する家々の風景」では、家の外に広がる風景の変容について、自身の生まれ育

った町の変容、空き地の発生、様々な土地の暮らしから見える家の有り様について論述する。

第2章「窓からの眺め」では、“窓”を起点に、主体を取り巻く身近な環境への観察行為の繰り返しによって生まれる、個々人にとっての固有の“眺め”について考察する。第1節「開かれた窓」では、家の内外の境界に位置する“窓(眼)”の存在、建築物で窓の果たす役割、絵画史の中で描かれた“窓”とその表象について、筆者の個人的体験に触れながら、自作品での“窓”とそこから外界を“眺める”行為について述べる。第2節「連なる窓－風景の手触り」では、“眺める”行為から風景のなかに入り込み、日常の景色を味わうための方法として、対象とそのイメージに“触れる”行為について論じる。また、三重県内の小学校で実施したワークショップの取り組みを中心に解説し、五感を介した外界との触れ合いから生起される“風景”とその眺めについて考察する。

第3章「博士提出作品《青の遊泳》－包まれる風景へ」では、第1章、第2章での論考を踏まえ、家と窓の外に広がる人の居る場所、“包まれる風景”について考察する。ここでは、筆者の祖先に関係する土地・三重県鳥羽市を訪ね歩いた体験から、暮らしが密に凝縮され、自然と人間が共存する海辺の町を題材にした自作品を始め、海とともに生きる海女や、その暮らしの様相をモチーフに制作した提出作品《青の遊泳》について論じる。「青」は日々移りゆく海と空の象徴であり、陸地と海中を行き来しながら生きる海女にとっての、身体を包み込む居場所そのものと言える。彼女たちの語りからこぼれ落ちる風景の断片を拾い集めながら、“包まれる風景”としての自作品《青の遊泳》を提示する。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、自らの世界観の拡張ともいべき軌跡をたどりながら、あらためて自身の居る場所（「所在」）とその形態（「輪郭」）を問い返す試みを論述した創作論である。

四方の坂道の上であり、周囲の家並みが見通せたという筆者の家（実家）は、「所在」の論考、作品表現のいずれにおいても起点となっている。そこから、窓からみる周辺環境、留学やフィールドワークを通して土地に生きる人々の生活や環境へと思考が広がり、それぞれに「所在の輪郭」があることを知る。論文サブタイトルの「包まれる風景へ」は、環境への一体化が筆者のめざすあり方であることを示す。

第1章「所在の輪郭－人の居る場所」では、生物学者・哲学者のエクスキュルの「環世界」の理論をとりあげ、同じ場に生きる生物でもそれぞれが異なる世界をもつこと。また和辻哲郎の人間・風土論に触れ、homeとhouseの両面から「家」について考察する。介護実習で出会った認知症の老女が、毎日「家に帰らなきゃ」と繰り返したことは、多くを忘れてなお“帰りたい”場として刻みこまれている「家」の存在の深さを知ることになったようだ。また筆者の部屋（実家）は窓が四つあったといい、筆者の作品の明るく柔らかい色彩や、なかば抽象化されて多く登場する家並が、この記憶に発していることを容易に想像させる。

第2章「窓からの眺め」では、世界(外)を見る目としての窓について、フェルメールやマティス、自作品をとりあげて解説。窓外の景色は外界であると同時に、内界(自身)の視線の投影でもあり、視覚と同時に触覚をとまなう“風景の手触り”があることを述べる。その延長上に、三重県津市の小学校で行なった「風景に触れる」ワークショップは、筆者が実際に風景に踏み入り、土地と暮らしの中に“包まれた”体験として、提出作品につながっていることがわかる。

第3章「博士提出作品「青の遊泳」－包まれる風景へ」では、筆者の家系の祖先の地でもあるという三重に足を運ぶようになって訪れた、海女の暮らす小さな漁村（鳥羽市石鏡（いじか）町）で、海女の人々と対話しながら制作した提出作品について解説する。筆者自身が海に潜ったわけではないらしいが、海の青と、その向こう側に現れた土地の色を描いた作品だという。個々の作品は抽象化されているが、それぞれワカメの天日干しや、船玉（ふなだま）様、漁網、海底などをイメージしているらしい。

本年度はコロナ禍でフィールドワークなどに大きな支障が出たため、本論文も作成進行に難渋したが、丁寧な論述とよみやすい文体、また作品や色彩を連想させるイメージ力のある文章は、審査会でも好評だ

った。学位論文にふさわしい論考として、審査員一同の承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

稲垣 美侑は、博士提出作品として、《青の遊泳》と題した11点の連作を発表しました。彼女の作品は、三重県鳥羽市石鏡町の海女文化や景観を調査したものです。この調査には、2019年と2020年に行われた現地調査が含まれており、網の修理やわかめの収穫・乾燥など、石鏡町で作業をしている海女さんとの間で持続的な交流が行われてきました。このシリーズは、主体の物理的・心理的な空間移動にまつわる彼女の思いと関係しています。またこれまでの作品制作では、人の居る場所としての身体、家、地域など、身近な環境を再考するようなテーマから制作を続けてきました。

以前のシリーズの中には、三重県内の異なる地域の亀山、紀伊長島、神島などをリサーチの基にした作品があります。今回、三重県に直結する海女の伝統的な女性文化を研究することは、作家にとって特に意味のある題材の選択であったと考えます。今回の《青の遊泳》シリーズの絵画では、地域の風景や海女道具、海草などを視覚的に参照しており、これまでの作品からの転換を示しています。

自己の可能性を着実に開拓している彼女の制作姿勢を評価すると共に、博士作品として提出された作品は、いずれも稲垣 美侑の絵画世界を提示するものであり、博士の学位を認めるに相応しい優れたものであるという評価で全員が一致しました。

(総合審査結果の要旨)

稲垣美侑の博士論文発表は2020年12月18日に大学美術館3階に於いて行われた。その後別室に於いて本学生への口述試問論文、論文「所在の輪郭一包まれる風景へ」、修了作品「青の遊泳」の最終審査を行った。審査は主査O JUN、論文第一副査に佐藤道心教授、作品第一副査にLINDA DENNIS女子美術大学准教授、副査に三井田盛一郎教授の4名で行った。

論文は筆者の家にまつわる個人的体験をもとに、やがて次第に外界へとその身体と意識を拡張をさせてゆくなかで経験される場処、人、自然、素材など他者（物、処）との関わり、またそのことによる制作動機の変化、思考の変遷、制作方法と表現形式の変化、作品について論述されている。筆者の様々な移動を繰り返す行動様式と並行して変容してゆく意識と実制作は、不可視と可視の領域で経験化され創作物（絵画作品）へと結晶化してゆくプロセスの記述が一種のビルドゥングスローマンを読むような印象を持った。同時に本論文は筆者による独特の風景論、身体論ともなっていてその結実としての絵画作品群「青の遊泳」を読み解くキーともなっている。論文指導をいただいた佐藤道心先生からは、本論のなかで繰り返し記述される自然や事物の色彩についての論考は、筆者の絵画作品にとって最も重要なことは色彩であるということを証明しているのではないかと指摘があった。なお、論文執筆、発表、プレゼンテーションなど行う際には、時系列や順序に必ずしも従うのではなく、先ず本人が最重要と考える事を最初に述べるべきであるとの指摘も受けた。作品第一副査のLINDA DENNIS先生からは、これからの筆者の作家としての成長が大いに期待できる可能性を感じるとともに、これまでの作品スタイルであった絵画と異素材によるインスタレーションが修了制作ではすべて絵画であったことに多少とも違和感を覚えたとの意見がでた。同副査の三井田先生は、筆者には二つの制作のベクトルがあり、今回のこれらの絵画空間を基に得た空間概念がこれから立体やインスタレーションに向かった時にどのように生かされさらに変化するのに興味深いと発言された。主査は、総覧してみて、本人が場や事物のなかを移動しながら変容してゆく諸感覚を言葉で記述し並行して作品で表現されていると見た。筆者の論考が進むなかで、途中から絵画制作の方が自らの言語に叱咤され背を押されたようにも思えた。自分の「現在」に何が重要かと得心した体験があったのではと推察する。そういう意味で本人が論考と実践をその両輪で動かしたことはいい

機会を得、この体験をこの先の創作活動に生かすべきと考える。新作は至る所に、これまでにない色彩、形の発現を見せている。ただ、この変化が少なくともあと数か月早ければさらにどこまで踏み込んで描かれたであろうかと思われる。そのことが惜しまれる。

最終審査でもそれぞれの先生から意見が出され審議された結果、稲垣美侑の博士論文、修了作品とも充分、博士号取得に相応しいレベルに達していると判定され是を合格と決定した。